

アートサイト 便り



～参加団体のスタッフ有志レポーターによる、冬のはじめのアートサイト取材レポート

横浜アートサイト参加団体のメンバーがプロジェクトを訪問してレポートする『アートサイト便り』(2011年度からスタート)。レポーターは有志で結成しています。アートプロジェクトを手がける一員が、訪問先の活動に触れて感じた生の声を聞いてみましょう。

更新中!

Facebook

www.facebook.com/yokohama.artsite



第3回寿灯祭会場風景

広場天井に向けた映像プロジェクション

Magical Comedy Goes to your Town!による人形劇

平魚泳+大蔵勝彦によるライブ

寒い日の間にポツとあったような穏やかな日曜日の夕方。寿町総合労働福祉会館の広場に足を運ぶと、今年3回目を迎える寿灯祭のろうそくが次々と小さな炎の花を咲かせている。ライターを手に火をつけていくと、子供たちがその場で作った色紙のわっかをかざせてくれる。「寿町でイベントをする、色々な方が手を貸してくれるので、こちらも甘えて参加する楽しみを感じています」というコーディネーターの友川綾子さんは忙しく走り回りながらもずっと笑顔と絶やさない。その温かい言葉通り、手にしたライターの炎からろうそくに火が付くと、じんわり胸が溶けてくる。集まってくるおじさんたちが風よけになつてくれた。小さな花畑は満開になつた。なんだか知らないようにどんだんのつながりができてきたんだよね」と話してくれる寿灯祭コーディネーターの河本満さんのお話を象徴するかのようだ。お花畑のところに色紙を添える大きなろうそくの木はキャンドルアーティストのE.C.O.N.I.さんの作品。「本作の日に数日かかることもありますが、もう汗まみれの力仕事です」と言いつつE.C.O.N.I.さんの作品は、馬車道の結婚式場「カサデアジェラ」さんから提供された美しい残りのろうそくがよみがえりサイクルキャンドルだ。小さなろうそくを入れたワンカップの空き瓶は寿町内の酒屋「山多屋」さんが提供してくれている。アーティストの協力もあって、いろいろなお客さんのネットワークが広がっている。灯で心温まる、会館の屋外天井を使った映像ユニット「みんなのうた」による映像プロジェクション「Magical Comedy Goes to Your Town」による音楽と人形劇、平魚泳のシャベと力強い歌、そしておじさんのギターと懐かしいフォークソングが夜中の3カ所をバックに懐かしさを誘っている。おじさんや子供たちと一緒からだを揺らしている、もう昔かこの町をこの場所を知っているような気になつてくるのだ。また来年も寿灯祭に来ようぞ!

つなりの灯り「寿灯祭」取材文
カドベヤ・オーブン・デイズ「つどおう・かたろう」ことを起こす 横山千晶



ワダヨコ 現役大学生の学びと実践。
取材・文 アフリカからのお客さんプロジェクト イシワタマリ



横浜国立大学キャンパスからほど近い、和田町商店街の旧町内会館。地域の人々と現役大学生たちが交流する「ワダヨコ」の拠点を訪ねました。学生発案の道具棚や椅子が並び、素朴で心地よい空間設計。毎週月曜放課後に開かれる「寺子屋」には、地域の小学生たちが集います。大学生に勉強を見てもらったり雑談したり...それぞれが思い思いの時間を過ごしていました。寺子屋のほか、陶芸教室や学生映画の上映会といった月1回のイベントのたびに、幅広い年齢層の人々が集うそうです。寺子屋の担当は教育学科の学生、空間設計担当は建築学科の学生と、専門分野をフル活用。学生たちにとっては自分の関心に応じた実践のできる絶好のチャンスだといえます。地域の人々にとっても、こんなふうに現役大学生の学びと実践の現場に和気藹々と関われるのは貴重な体験ではないでしょうか。(取材日2012年:12月17日)



2012年度には拠点となる旧町内会館のリノベーションを行った



「寺子屋」の様子



長者町☆アートプラネタリウム「まちあるき」に参加しました
取材・文 金沢文庫芸術祭 井上えつこ



北川純 (エロース・ビル谷間)

上益益雄 (ビルピアス)

長者町アート☆プラネタリウム オリジナルエコバッグ

アートのスペース「Chapter2」に集まったのは総勢11名。代表の竹本真紀さんの案内で方々の長者町へと繰り出しました。建物を出るとすぐ、圧倒されるほどの大きな一本の赤いバラが視界に飛び込んできます。《エロース・ビル谷間》と題する北川純さんの作品は、灰色のビルを背景にため息がでるほど美しい。この「まちあるき」は、こんな大きなまちが展示と鑑賞できる一方、お店にこっそり隠れている竹本真紀さんのキャラクター「ちょうふくちゃん」を探すとのお楽しみあり。街全体を舞台にした宝探しのように、メガネ屋や床屋、レストランなどの扉や窓にちょうふくちゃんを見つけ、一行はワイワイがやがや。普段は通らないような建物の階段を上がったり、お店をのぞいたりして、街がぐつと身近になりました。同行した上益益雄さんは、自身の作《ビルピアス》の案内。普通に歩いているだけでは気づかない、ちょっと見上げた片隅に作ってある文字通りビルのピアス。これを見つけると何だか街のヒミツを知ってしまったような気分です。闇が濃くなってくるにつれて、あかりが鮮やかに光り、にわかに活気づいてくるこの街。人間くさい街は、格好の表現の場でもありました。(取材日:2012年11月18日)



竹本真紀 (ちょうふくちゃん)



寺×アートでつなげる カフェ・テラ・テラ
取材・文 寿灯祭キャンドルコーディネーター nicori



12月中旬、戸塚駅から徒歩7分の場所にある善了寺にて、「ボスト3.11を創る」をテーマに行われたキャンドルナイトを訪問しました。境内までの道に沿って置かれたキャンドルに導かれるように進むと、まず目に留まったのは、日本列島を型どったキャンドルアート。今回のキャンドルアートのテーマに沿って「東北」と「広がるつながり」を表現したものでした。本堂では、3.11のその後と向きあうための数々のプログラムが展開されました。イベントを主宰するNPO法人カフェ・テラ・テラで活動する学生が石巻の在宅老所「よってがいん」を訪問した様子を報告したり、若い、病弱など人間の弱さを主題とするトークライブや、音楽ライブがあったり。年令を問わず集まった地域の人々が笑いながら肩を寄せ合い、時には真剣に、プログラムに見入っている姿がとても印象的でした。NPOの代表、成田さんは、「アートが高尚になり過ぎているような気がする。アートは本来、誰でも自由に表現できるもの。それを普通の状態にしたい」とおっしゃいます。今後も、キャンドルナイトを通して、地域と人が気持ちのこもったアートでつながっていくことがとても楽しみです。(取材日:2012年12月14日)



地域の人が集いさまざまなプログラムが行われた

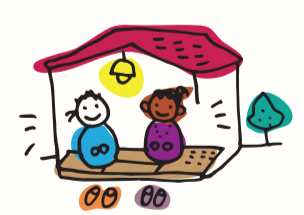
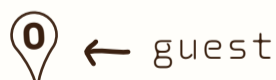


キャンドルでつくられた日本列島



イシワタマリにて共同制作中のアサダワタル(左)とエメカ・オグボウ(右)

相鉄線の星川駅を下車、道のりの詳細な案内高台の住宅地に、アフリカはナイジェリア出身のエメカ・オグボウさんと関西出身のアサダワタルさんが滞在するイシワタマリを訪ねた▼アフリカからのお客さんプロジェクトの参加アーティスト、エメカさんとアサダさんと共通点は「日常を編集する」という表現スタイル。横浜にいてstranger(旅人、異人)である一人には、この街の光景や音が、どのように見え、聴こえるのか。アーティストならではの視覚や聴覚が、住み慣れた都市の日常に新たな眼差しと聞き耳を与えてくれるに違いない▼横浜アートサイトの中でも、最も小規模なこのプロジェクト。参加アーティストと一般参加者の数で測れば、この活動の結果はとも見えない。しかし、二人のこの街での滞在の出会いや経験は今後、アフリカや関西だけでなく、日本各地や世界各国で、彼らの表現活動とその表現に触れる人々の心に響き続けることだろう▼ありふれた住宅街のありふれた民家に、横浜にいてstrangerであるアーティストが共同生活することでのような風が吹くのか、風は、目に見えないが、たしかに吹いている。(取材日2012年12月12日)



strangerの風は彼方へ
ホームステイ(アフリカからのお客さんプロジェクト)
取材文
文化生態観察
大澤真雄



全体が光に包まれた時田公園

高速道路の高架に映像を映し出す



帰り際、高層を見上げるとそこにも光のアートが映し出され、さらに大岡川には光の衣装をまとった人々がカヌーをゆつたりと漕いでおり、川面に映る光を見ていると師走の忙しさを忘れてくれるような時間旅行をしている気分になった。(取材日2012年12月16日)

大岡川アートプロジェクト
「光のふるむななど」に参加して
取材文 よま音楽広場実行委員会
高田由利子
12月16日(日)の夕暮れ時、大岡川と中村川の分岐に位置する時田公園で開催中の大岡川アートプロジェクト「光のふるむななど」を訪問した。公園までの道中で目に留まったのは、ゆつたり流れている大岡川沿いに灯されたキャンドル行灯。公園までの道のりを誘うような静かな佇まいがあった。高速道路の高架下にある橋を渡ると公園が目の前に広がった。一面に敷き詰められたキャンドルの光は幻想的で、どこかスタスタでもあった。むかしはなしのコーナーでは、(はなさかじいさん)の桜がキャンドルで見事に演出されており、また、(シゲレラ)では、大きな靴がキャンドルで形作られており、まはゆいばかりに輝いていた。光の色彩は見事に物語を再現しており、温かさに加え、見ている人々のイメージを掻き立ててくれる。園内はこどもから大人、そして犬も含め、思い思いに過ごしていた。キャンドル迷路で遊ぶ子ども達とミッド型のペトボルキャンドルの前でポーズを取る人々、カフェで一休みする方、折り鶴とキャンドルのコラボを静かに見続けている人々、また、ワークショップで作ったLEDの虹色ちょうちんを木に吊るしている人など、様々な過ごし方がある。プロジェクトのスタッフ、服部典子さんにお話を伺うと、キャンドルナイトはお天気に左右されるため、当日、スタッフボランティアの方達が総出で作品を並べられたとのこと。まさにチームワークの結晶でもある。また、今年には地域の小学校、中学校も参加してくれた事でより賑やかになったとおっしゃっていた。街に根付くアートプロジェクト、たけさんのキャンドルの数々が地域に住む人々の表情を描き出してきているようにも感じた。